

南九州弥生式土器の再編年

河 口 貞 德
出 口 浩

1. まえがき

南九州における弥生式土器の編年については、昭和39年刊行された弥生式土器集成(1)があり、その後「日本の考古学Ⅰ」(2)、「考古学講座4」(3)などにもとりあげているが、その内容についてみると多少の差異点がみいだされる。

一方最近発見された入来遺跡などの新しい資料も増加し、従来の編年にみられる空白が補填されることが明らかになり、これにともなって文化の系統についての考察も必要となった。そこでこれを機として、南九州の弥生式土器の編年について、あらためて考察を加えてみたい。

2. 縄文系の土器

弥生文化に縄文系の土器、特に壺形土器が残存する現象は、東海地方とともに西日本全域にみられる。(4) 九州地方でも同様で、縄文系特に夜臼式土器の影響を受けた壺形土器を出土する遺跡が各地にみられる(5)。南九州でこの種の遺跡をひろってみると、薩摩半島では、川辺町大田尾(6) 金峰町高橋貝塚 吹上町今田(7) 全入来(8) 全小野浜(9) 全黒川洞穴 伊集院町東昌寺(10) 鹿児島市玉里(11)などがあり、大隅半島でも、根占町柿迫(12) 吾平町掘木田(13)がある。

このように現在発見されている遺跡についてみると西海岸に圧倒的に多いことがわかる。

この手の土器は特に南九州の弥生式土器文化に大きな影響を与えており、その編年上の位置づけは南九州弥生式土器の編年上重要な意義をもつものである。

縄文系土器の様相を最もよく示すのは高橋貝塚であり、その位置を知るために直木東昌寺遺跡出土の遺物も有力な手がかりになる。高橋貝塚の資料から縄文系土器をあげよう。高橋貝塚の壺形土器に、口縁部と口縁下の凸帯に刻目を施したものがある。これが縄文系と見られるもので、更にA, B, Cの3種類にわけられる。

A (高橋貝塚第8図17, 28, 23)

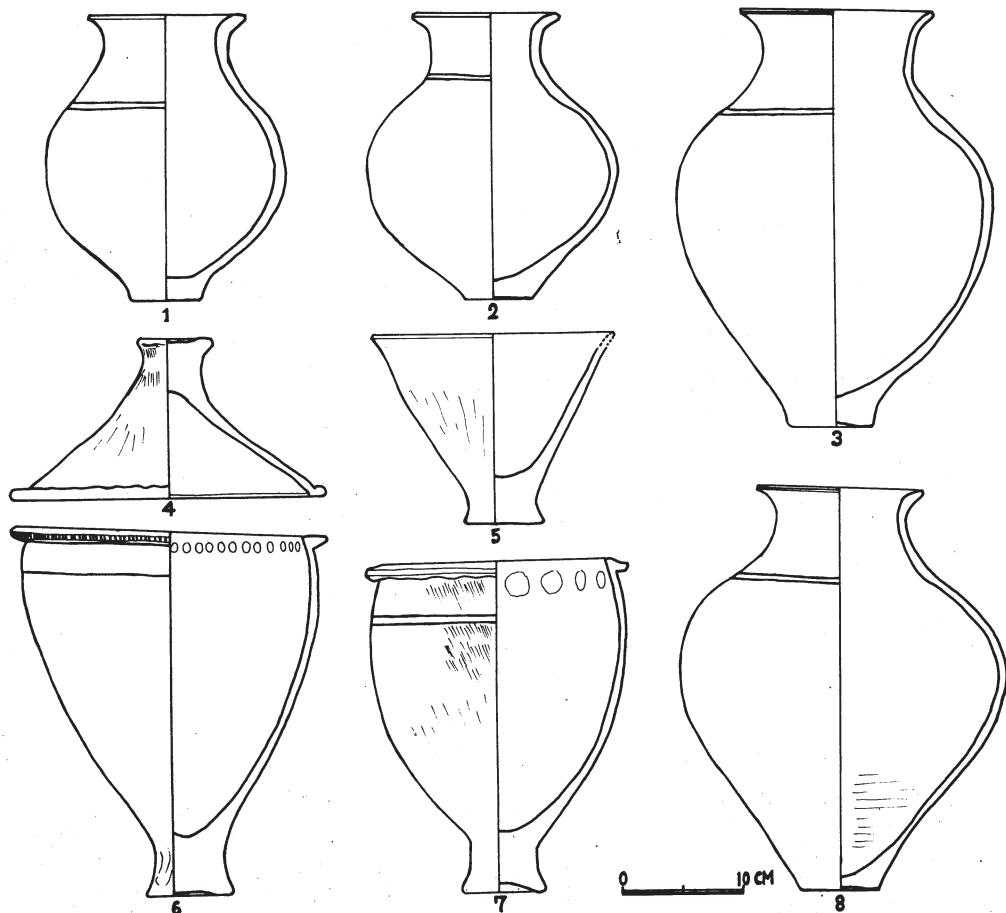
口縁上端が外彎し、口縁下の凸帯と共に刻目を施したものである。口縁と凸帯の間隔はわりに広く、凸帯附近の張り出した器形もみられる。安定した平底壺形土器である。

B (高橋貝塚第8図27)

口縁上端が外彎していることは前者と同様であるが、口縁下の凸帯はなく、この部分が段となって、口縁外端の小凸帯と共に浅い刻目を施したものである。

C (高橋貝塚第8図26 全第9図29)

直口または内彎する口縁端外面に粘土帯を貼りつけて上面を水平に仕上げ、口縁下の凸帯と共に刻目を施したものである。凸帯間の間隔の広いものと、狭くて胴部の張り出したものとがある。共に安定した平底である。



第一図 入来遺跡出土土器

以上3種類のうち、A, Bは高橋一式の壺形土器と関連のあるもので、層位的にも中層位に出土しており、前期のうちでも高橋一式に続く古い時期と考えられる。

Cは上層位（第2層）出土のもので、A, Bに続く時期で前期後半に位置するものと思われる。Cに共伴する壺形土器を高橋の資料に求めると、Cの壺形土器がⅡ層を主としⅠ層からも出土していることから、同層位の壺形土器の中から抽出し、更にⅠ層の資料を参照することになる。胴部の最大径が中央より上にあり肩の張った器形で、平底の土器である。頸部から口縁部へはかなり屈曲し、口縁部は小さく外反するが、肥厚はみられない。口縁端部に凹線を施したものもある。頸部と胴部のきかいの段は失われて、この部分に粘土紐をはりつけ、三角形の凸帯をつけたものもある。この場合沈線を設け、その上に凸帯をはり付ける手法が用いられて

いる。文様は籠または貝殻による平行横線文、羽状文、重弧文などが施されている。彩文としては頸部に赤色の平行斜線を山形に施文したものがある。(高橋貝塚第7図1, 8 全第14図135~138, 140~144, 145, 149, 151全第2図版1)

東昌寺遺跡出土の弥生式土器はB類1例を除くとC類に該当する甕形土器が大部分を占め、小量の壺形土器を含んでいる。壺形土器の肩部破片は、紅褐色に研磨され、籠描の横線文が施されており前記と同様な組合せを示している。

縄文系土器のうち各類の分布状況をみると、南九州ではC類が多く、鹿児島県の遺跡出土の縄文系土器は、ほとんどこの類に属する。熊本県では斎藤山遺跡出土の甕形土器に、A類に属すると思われるものがみられ(14) 福岡県では板付遺跡、飯氏遺跡、亀ノ甲遺跡に縄文系土器の出土がみられる。板付遺跡ではB類(15) C類(16)、飯氏遺跡ではC類(17) 亀ノ甲遺跡ではA類(18) C類(19)が出土している。このうちA類B類については高橋貝塚出土の土器とよく一致するが、C類については、板付及び飯氏遺跡出土の土器に多少の差異がみられる。両遺跡の甕形土器は口縁部と凸帯との間隔がせまく、底部が小さく、厚くなり、中央に大きな窪みをもつか(20)あるいは浅いあげ底(21)となっている。この底部にあらわれる特徴は、後出の板付I式(22)、城ノ越I式(23)の甕形土器の底部、あるいは、熊本県境目西原遺跡出土の甕形土器(24)、高橋貝塚出土の高橋I式甕形土器(25)、後述の鹿児島県入来遺跡出土の甕形土器などにみられるあげ底ふうの小さな厚い底部、あるいは浅いあげ底となった脚台に関連の深いもので、これらの先駆をなすものといえる。したがって板付、飯氏出土のC類は、この形式のなかでは時期的に多少新しいものといえよう。

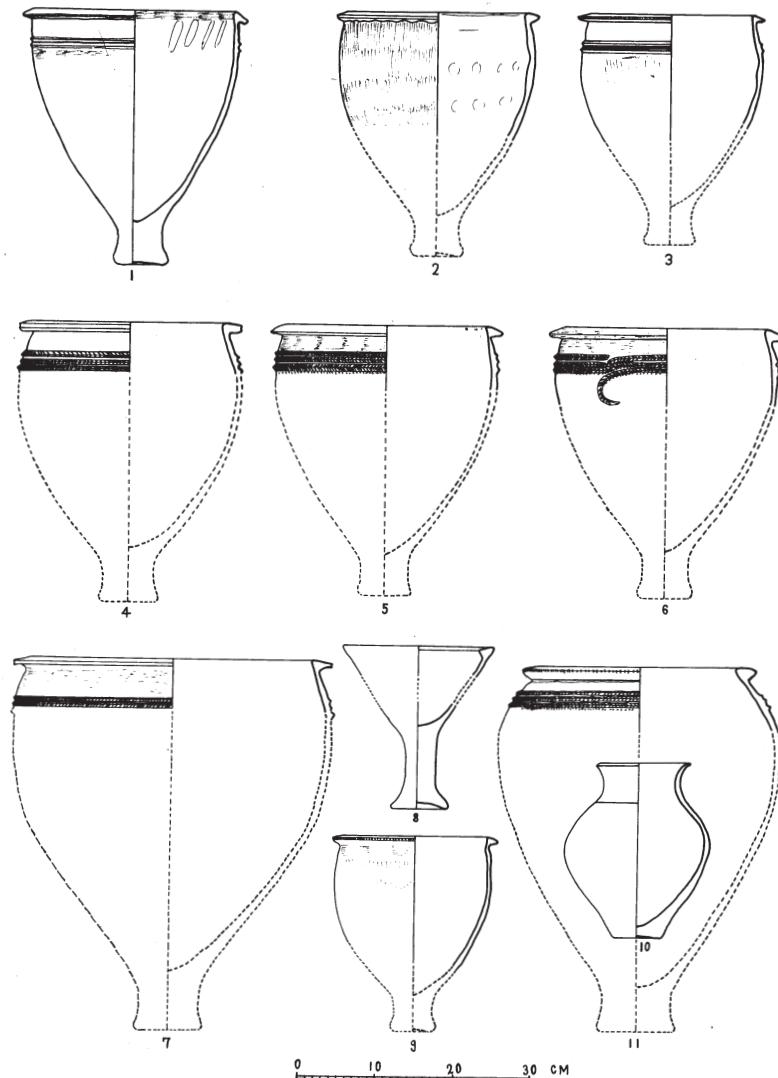
九州地方における縄文系統の土器の発生についての考察をつけ加えよう。前述の他に縄文系土器としては大分県地方に行なわれた下城土器があるが、これは中期に属するものである。福岡県では板付、飯氏遺跡など県北部にみられる縄文系土器は比較的新しく、南部の亀ノ甲遺跡出土の土器は、九州西海岸の中部南部に分布する斎藤山遺跡、高橋貝塚などと共に古い形式のものである。以上の分布状況から九州地方における縄文系土器の発生地方は九州西海岸地方のうち中南部地域であろうと思われる。

従来彌生式土器文化が北九州地域に発生し、各地へ波及していくという考察を基礎に、九州各地にみられる縄文系土器文化もまた北九州に発生し、各地へ波及したものという考え方方が意識的に、あるいは無意識のうちに進行なわれているように思われる。然しながら、九州西海岸に分布する縄文系甕形土器は、縄文時代晩期末に九州一円に行なわれていた野白式と、北九州に発生した板付I式との接触によって発生したものと思われる。縄文系土器として最初にあらわれたものは、板付I式の甕形土器の口縁下に刻目凸帯をめぐらした形のA類土器および、同じく板付I式の甕形土器の器形に胴上部に段を設け、この部分に刻目を加えた形のB類土器であろう。これらの土器は外見上夜白式土器に酷似しているもので、板付I式土器の文化が、夜白式土器文化の地域へ伝播し吸収されて行く過程の中に発生したもので、その時期は前期のころであろう。夜白式土器文化は北九州以外の地域においては前期をかごろまでは残存したものと思われる。

高橋貝塚においては、この現象が層位的に証明される。この夜白式土器と、前記の A, B 類土器とが共存しその相互影響によって C 類が生まれたものと思われる。このような現象の起った地域が、九州西岸の中、南部地域であったと思われる。

3. 入来遺跡 (26) の土器

(1) 溝状遺構 (27) の弥生式土器



第二図 入来遺跡出土土器

壺形土器は6種類ある。A（第5図1） 壺形土器胴部破片1個を出土した。胴部に2平行沈線を横位に付しその上部に貝殻による重弧文を描いたものである。高橋貝塚にも同様な形式がみられる。器形は平底で胴部が張り、肩部から口縁部へ屈曲しながら細まり、口縁部で外反する前期の終りに北九州から、九州西岸に分布する器形と思われる。B（第5図2）

口縁部1個出土の土器である。肩部から口縁部へ屈曲しながら細まり、頸上部で稍々外びらきとなり、口縁部は大きく外反して上面は水平に近い。口縁端部に凹線をめぐらしている。

口縁より頸部内面へかけて、2条の垂直な刺突連点文を施しているのが特色である。焼成は良好で、灰褐色のうす色にしあげられている。器形としては北九州系統である。

C（第5図3～6）口縁部及び胴部の破片が小量出土している。器形の全貌は判明しないが、頸部から口縁部へ次第に外彎して、口縁部近で大きく外反し口縁端部に凹線を施したものもある。胴部のはった球形の平底土器であろう。口縁内面には1条の凸帯をめぐらし、凸帯より上面に小管による連続文を、2条乃至3条に放射状に施したもの、口縁端に平行に施文したものがみられ、又頸部と胴部を2条の沈線で区切り、その下部に前記と同様の連点文で重弧文を描出している。胎土は粒子が細かで、赭褐色に焼成されている。文様の構成は北九州的であるが、施文法に地域的特色がみられ、器形の上では西瀬戸内系文化の要素をもっている。

D（第4図1～6）小量の口縁部土器片が出土している。頸部から口縁部へ外彎し、口縁端に凹線をめぐらしたものがある。口縁内部に1条乃至2条の凸帯をめぐらし、外部にも凸帯をめぐらしたものがある。大形土器が多い。胎土は砂粒を多く含み、黄褐色の色調を示している。これも西瀬戸内系文化の要素をもつものである。

E（第1図1～3,8 第2図10）溝状遺溝出土の土器のなかで主体となるもので、壺形土器のほとんどがこの形式でしめられている。球形の胴部に上すぼみの頸がつき、口縁は外反し、端部は平坦かやや凹線がかたった形態を示す。頸部と胴部の境に2条乃至1条の細い沈線をめぐらし、底部は厚い平底である。器高の高いものは、下胴部が細くなり肩の張った器形を呈している。器面には砂粒がめだち、色調は赭褐色、紅褐色が多く時に灰褐色のものもある。球形の胴部、頸部と胴部の境の沈線、上すぼみの頸など、高橋貝塚出土の前期の壺形土器の特色をよく残すものであるが、同時に北九州の前期後半の壺形土器につながるものといえる。

F（第4図7～12）は頸部から胴部へかけての破片数個を出土しただけである。したがって器形の全貌は不明であるが、頸部と胴部の境に2ないし3条の断面三角形の凸帯をめぐらしたものである。頸部は彎曲しながら細くなっているが、口縁部の形態は不明である。胴部は球形に近く平底の土器であろう。黄褐色で胎土には砂粒をかなりまぜている。

以上6種類のうち、A Eは北九州系の文化を示すものであるが、Bは北九州的な器形のなかに、九州南西地域の特殊な連点文を加えたものであり、Cは西瀬戸内的な形態に北九州前期の壺形土器の文様の要素を地域的な連点文で表現したものである。Dは西瀬戸内的な形態を示すものである。かく多様な文化が交錯しているが、主流は北九州系のA、E文化によっ

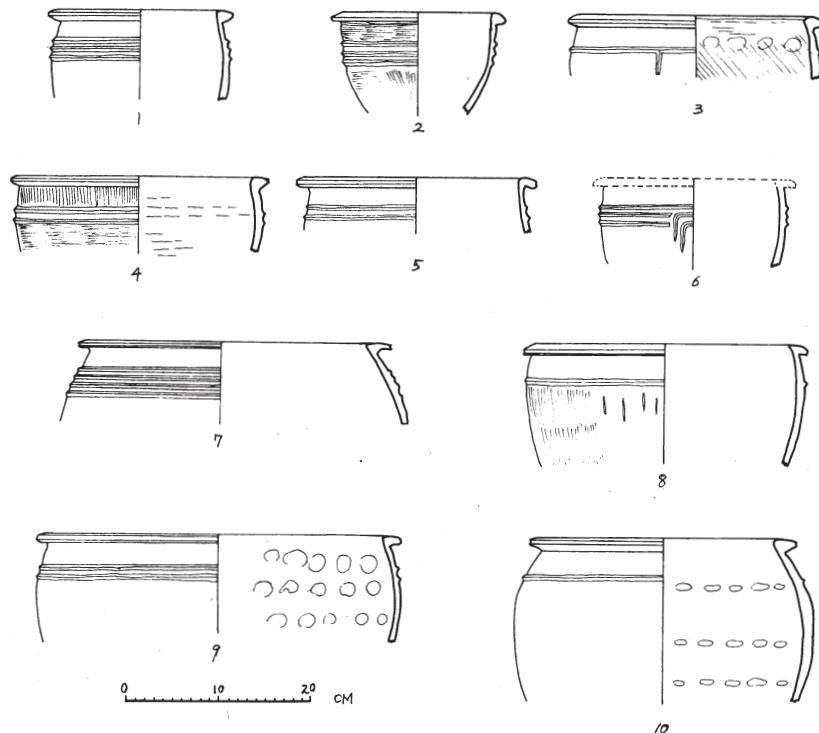
て構成され、西瀬戸内系文化が波及して両文化の接点となっているが、西瀬戸内系文化は勢力が微弱で、局地文化によって変容され、地域文化に影響を与えることなく消滅する。なおD類土器は東昌寺遺跡高橋貝塚にも出土している。

甕形土器は9種類ある。A（高橋貝塚第8図26、第9図29）前述の高橋貝塚出土の縄

文系土器のうちC類と称したものである。出土量はきわめてすくない。壺形土器A類と共に伴するものと思われる。

B（第6図1～4）

直口またはやや内彎する口縁の上端外面に粘土帯を貼りつけて、上面を水平あるいはやや外下りに仕



第三図 入来遺跡出土土器

上げ、口縁下の1条乃至2条の細い断面三角形の凸帯と共に浅い刻目を施したものである。

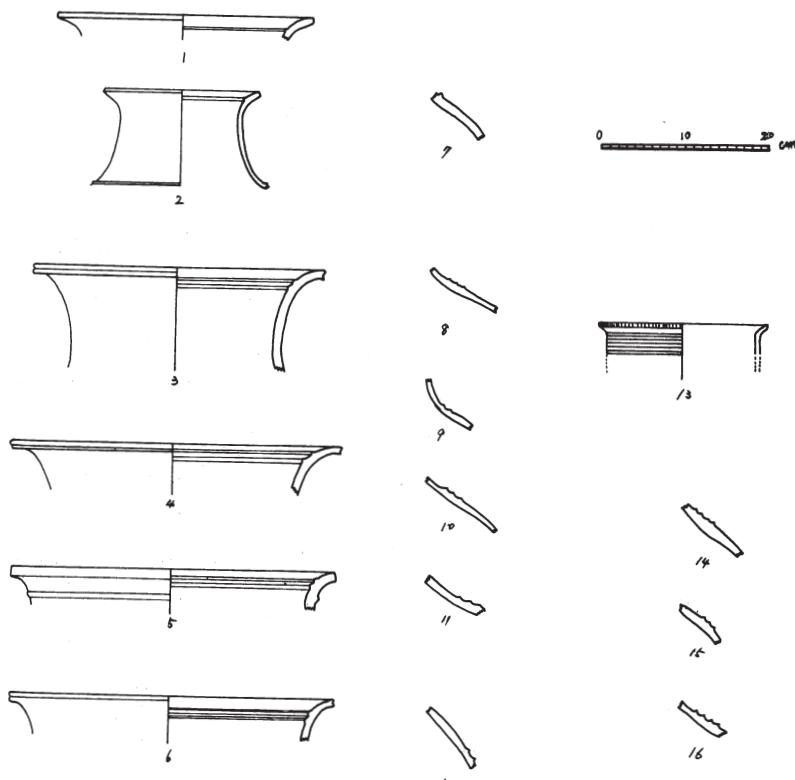
口縁凸帯の下面に指でつまんだような凹凸を残し波状を呈するくせがある。この特徴は、

A、I類を除いてすべての甕形土器に共通するものであるが、H類に至ってこの特徴を失ったものもある。底部は細く、且つ肥厚して脚台状を呈し、ややあげ底気味となるのがA類との著しい差異である。福岡市飯氏や板付出土の底部の肥厚する甕形土器（板付Ⅱ式）に関連のあるものである。色調は赭褐色を呈し、器面に砂粒がめだっている。・

C（第6図5,6 第2図1,3）口縁と口縁下に粘土帯をめぐらし、細いあげ底気味の脚台を有するなど、ほとんどB類とかわらない。ただ口縁のみに刻目を有し、口縁下の凸帯の刻目は失われたものおよび口縁部に刻目がなく、口縁下の凸帯のみに刻目のあるものである。

D（第6図7）口縁と口縁下の凸帯に刻目の失われたものである。口縁凸帯の附着部の下際にみられた波状の凹凸が失われてなめらかになったものもあり、器形は胴部のはり出しが

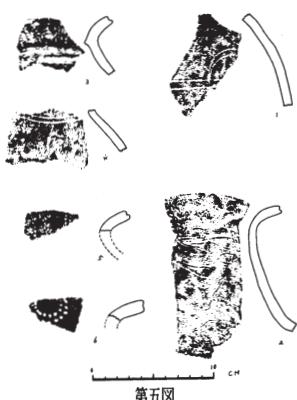
著しくなるのが一般である。



第四図 入来遺跡出土々器

以上にあげた壺形土器は、沈線を施し、その上に凸帯を付着する手法を用いている。

E (第1図6, 第6図8) 直口又は内彎する口縁に刻目をもつ粘土帯をめぐらし、上面を平坦または外下りに仕上げる器形で、底部もB, Cと同様である



第五図

が口縁下に1乃至2条の沈線をめぐらす点に特徴がある。まれに3条の沈線を有するものもみられる。

F (第1図7, 第6図9) 口縁に刻目のないもので、口縁下に1ないし2条の沈線をめぐらすものである。器形、焼成、口縁の粘土帯を付着するときにできる波状の凹凸を残すくせなど、B, C, Eと同様である。

G (第2図9, 第6図10) 直口または内彎する口縁に粘土帯をめぐらし、あげ底気味の脚台を有する器形は前述の壺形土器と同様であるが、口縁下には凸帯も沈線も施されていないものである。

H (第2図2, 第6図11) G類と同様であるが、口縁

部に刻目のないものである。

I (第4図13) 胴径は口径よりも小さく、胴部ははりがみられない。口縁部は外彎し、

口縁端の下際に刻目を施している。口縁下に横位に8条の沈線をめぐらし、この沈線内と口縁外面を赤塗している。同一個体と思われ小片が3個出土しただけであるが、おそらく平底であろう。胎土は多量の砂粒をふくみ、風化によって器面にうき出している。

以上にあげた壺形土器のうちI類は唯1例の西瀬戸内系文化とみられるもので、他はすべて地域的特色を示す1系統の文化様相をもっている。壺形土器文化は複雑な文化系統の交錯を示したのに対し、壺形土器文化はきわめて単純な様相を示すのが対象的である。文化の伝播について壺形土器(29)と壺形土器とに差異のあることがわかる。

B～H類までの壺形土器は、口縁下に凸帯をめぐらすB、C、D(凸帯文土器)と、沈線をめぐらすE、F(沈線文土器)と、凸帯、沈線とも有しないG、H(無文土器)とに要約できる。

これら一連の土器は基本的には縄文系C類(前出)から発生したもので、口縁、器形にその特徴を受けついでいる。B、C、D(凸帯文土器)は特に口縁部と凸帯に刻目を施す手法を受けついだもので、次第に刻目を失っていく過程をよく表している。E、F(沈線文土器)に示された沈線文は北九州前期中頃及び後半の壺形土器(立屋敷式、板付Ⅱ式)にあらわれる沈線文の系統を引くものであろう。福岡県南部の八女市亀ノ甲遺跡(30)の南地区1号堅穴出土の壺形土器(D類)熊本県宇土市境目西原遺跡(31)B区(弥生貝塚)出土の壺形土器(2類D)などは共に口縁に沈線をめぐらしており、本遺跡のE、F類と密接な関係を有するもので、沈線文の流入系路をよく示している。

脚台については、その先行形態と思われるものが北九州の前期後半にあらわれている。板付Ⅱ式の壺形土器、飯氏遺跡出土の壺形土器の中の底部が細く、厚いものがそれである。

飯氏のものは底がやや広がり、すでに脚台状を呈したものもみられる。亀ノ甲遺跡出土の壺形土器D類、境目西原遺跡出土の壺形土器2類Dも底部が細まり、肥厚して脚台への過渡的形態を示している。

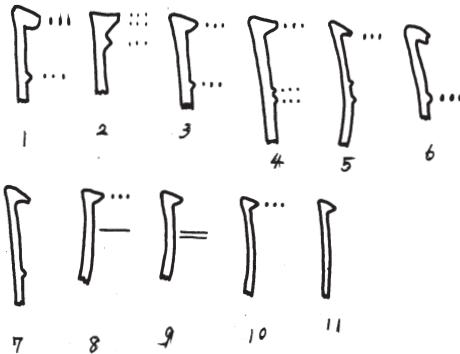
入来遺跡においては底部がさらに厚くなり、かつ細くなって柱状を呈するものもあり、底ひらきとなって完全に脚台形を呈するにいたっている。板付Ⅱ式以降共通する点は底面に指先で圧したような凹みを有するか、あげ底となっていることである。

以上を要約すれば、入来遺跡出土の壺形土器は北九州系文化から沈線文、底部形態などの文化要素を受け入れながら、九州西岸中、南部の縄文系土器を母体として発生したものといえる。

鉢形土器(第1図5)は図の完形土器1個を出土したのみである。底部は厚く、底ひらきとなり、胴部より口縁部へ直線を描いてひらいた深鉢である。胎土は粒子が細かで灰褐色に焼きあげられている。

蓋形土器(第1図4)壺用の蓋形土器で図6の土器とセットである。笠状にひらいた口縁部と同様の波状の凹凸がみられる。つまみは上げ底風にわづかにくぼんでいる。

組合せと編年についてみると、壺形土器のAと壺形土器Aは高橋貝塚および東昌寺遺跡においても組合せが推定されたものである。本遺構ではともに出土量が少ない。前期後半に位



第六図

置するものであろう。

壺形土器 E は本遺構の主体をなすもので、出土した壺形土器のほとんどがこの形式である。

亀ノ甲遺跡の 1 号溝内出土の壺形土器 B 類と同形式と思われるが、亀ノ甲では底部の形態が明瞭でなく、口縁部の形態に稍々古い形をとどめており、まれに弧文、重線山形文を有する点など多少の差異点もみられる。

この壺形土器と組あわされる甕形土器は、凸帯文土器 B, C, 沈線文土器 E, F, 無文土器 G, H の 6 種と思われる。これらの土器は本遺構の主体をなすもので、出土量も甕形土器のほとんどがこの形式で占められており、6 種の出土の量も略同様である。形式的にみると、凸帯文土器では B が C に、沈線文土器では E が F に無文土器では G が H に、それぞれ先行するものと思われ、B, E, G は並ぶものと思われるが、出土状況からみると同一時期と考えてよく、壺形土器 E とこれら 6 種の甕形土器は、前述の鉢形土器、蓋形土器と共に共伴するものと思われる。

亀ノ甲遺跡南地区 1 号堅穴出土の甕形土器 D 類は本遺構の甕形土器 F に該当するが底部では多少差異点がみられる。境目西原遺跡 B 区出土の甕形土器のうち 1 類は本遺構の B に、2 類 A は C に、2 類 D は E に、3 類 D は F に、4 類は H にそれぞれ該当し、本遺構出土の甕形土器の形式の大部分を網羅している。しかも口縁部凸帯下際にみられる波状の凹凸、凸帯文を付着する場合に器面に沈線を刻む手法など酷似した工作法の存在からみても両遺跡の間に存在する近縁性は否定することができない。しかし一面亀ノ甲と同様甕形土器の底部は肥厚しているだけでまだ脚台となっていない点で本遺構と異なる点も存在している。甕形土器の脚台は、北九州では城ノ越 1 式にいたって完全なものがみられるが、盛行した形跡はなく、以後消滅している。南九州では入来遺跡の他、高橋貝塚一層に多量に出土しており、この地域で盛行したことがわかる。

本遺構出土のこれらの壺形土器 E、甕形土器 B, C, E, F, G, H、鉢形、蓋形土器の組合せを形式とする遺物群の時期は中期初頭であろう。壺形土器では前期の文様を消失し、わづかに 2 本の沈線文を残すだけとなり、甕形土器では平底を消失して上げ底風の脚台が完成して一時期を劃するからである。

亀ノ甲、境目西原、入来遺跡を含む九州西海岸中南部地域において、これら一連の文化は、北から南へやや傾斜をもち乍ら醸成され、南九州地域で一つの形をもつにいたった。われわれは、この土器文化を入来式と名づけることが適當であると思う。

壺形土器 F と 麋形土器 D は共に出土量はきわめて少ないが、 麋形土器は凸帯文土器の系統で C 類に後続し、 壺形土器 F と組合せをなすものと推定される。このあと南九州の主流をなす山ノ口式の先行形式としてきわめて重要な位置を占めるものである。壺形土器は現在凸帯についての資料があるのみであるから明確な判断を下すことができない。壺形土器に凸帯文が発生するのは前記後半で北九州では下伊田式にあらわれる。頸部と胴部の境にみられる段あるいは沈線から転化したものではないかと思われる。初期のものは断面三角形である。その後中期前半の城ノ越式に至って頸、胴部境と胴部の 2ヶ所にめぐらされ、中期後半の須玖式では、頸、胴部ともに凸帯の数が増加する傾向がみられ、断面形も台形または口唇形をなすものがあらわれる。畿内では前期後半に壺形土器の口頸部の長くなった型式にあらわれる。

沈線文のかわりに断面三角形の凸帯を、頸部、胴部の他に肩の部分にも、それぞれ 3~4 条めぐらしている。特徴としては凸帯に刻み目を施していることである。

東九州でも前期後半の下伊田式該当の型式に凸帯文があらわれるが、断面は三角形である。中期前半の城ノ越該当の型式では断面が台形の凸帯があらわれ、また刻み目のあるものもみられる。後者は瀬戸内に盛行する刻み目文凸帯が波及したものであろう。中期後半にいたって須玖系や瀬戸内系といわれている諸型式の壺形土器の頸部、胴部に、再び断面三角形の多条の凸帯がめぐらされるようになる。

南九州で壺形土器に凸帯文のあらわれる時期はやはり前期後半である。高橋貝塚二層出土の彩文土器 (32) は、頸部と胴部の境に、断面三角形の凸帯 1 条をめぐらしている。この凸帯文は沈刻線の上に付着する手法を用いている。本遺構では、壺形土器 D のうち第 4 図②の土器も、頸部と胴部の境に 1 条の凸帯を有し、この時期に凸帯文が行なわれたことを示している。

中期初頭に位置する前期の入来式の壺形土器には凸帯文は発見されていない。壺形土器 F の凸帯文の祖形は現在のところ不明である。しかし山ノ口式の壺形土器は頸部と胴部に数条づつの凸帯をめぐらしているのに対して、F 類は頸部に 2 条ないし 3 条の凸帯をめぐらしているにすぎず、時期の下降にしたがって凸帯数の増加する傾向があることからみて、F 類は山ノ口式に先行する型式であることは推定できる。あるいは F 類の凸帯は入来式壺形土器の沈線文のかわりにつけられたものかもしれない。

一型式に包含される各器形、たとえば壺形土器と 麋形土器の間において文様要素に共通の文様が生ずるのは、中期にはじまるものとみられる。本遺跡においても、入来式の壺形土器と 麋形土器には共に沈線文をめぐらすという共通点があり、壺形土器 F と 麋形土器 D は共に断面三角形の凸帯をめぐらしている。弥生文化においては、中期にいたって地域に根をおろした地方性の濃い土器文化の発生がみられるが、前述の現象もその証拠とみるべきであろう。

壺形土器 C は前期の文様をもっている点から前期末とみられ、壺形土器 D は、口縁のひらいた器形 (第 4 図 3~6) と、頸部がしまり、口縁部で外反するもので、口縁部内側と、頸部と胴部の境に小凸帯を有する器形 (第 4 図 1, 2) とがある。前者は中期前半、後者は前期後半に位置するものと思われる。 麋形土器 I は前期末とみられる。

(2) (33) 東南部崖下遺構 の弥生式土器

この遺跡地は宅地であるが、そのためか攪乱された地点が多い。出土した遺物には前述の入来式土器の他に、入来式に後続する型式と思われるものがみられる。ここではその後続型式について述べることにする。

壺形土器は2種類をあげる。F(第4図14~16)前述の溝状遺構出土の壺形土器Fと同一型式であるが、頸部及び胴部の凸帯の条数が増加し、頸部では4条、胴部では3条のものがみられ、色調も褐色気味で多少の差異もある。出土量はきわめて少ない。

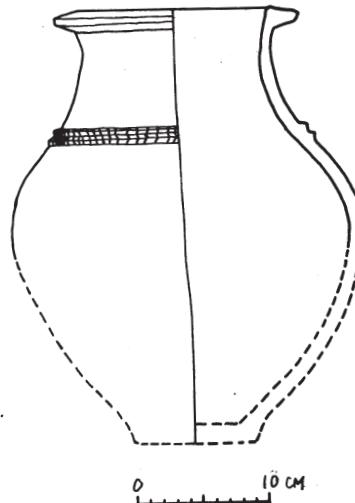
G(第7図)焼成は良好で、刷毛目仕上げの上をさらに鏡磨きしている。色調は外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈している。器形は球形に近く、胴部最大径がややあがる平底の壺形土器と推定され、頸部は上部へ細くしまり、口縁部はやや外彎し、口縁外側には粘土帯をめぐらしている。口縁上面はやや外さがりに仕上げられ、張り出しあまり長くない。頸部と胴部の境に2条の絡繩凸帯をめぐらしている。断面三角形の粘土紐をめぐらした後、籠で圧して絡繩に仕上げたもので、工作過程に生じた籠先による刻目を器面に残したもののがみられる。したがって絡繩凸帯の祖形は、かならずしも刻み目凸帯に求める必要はなく、粘土紐を器面に密着させるための工作過程から生じた偶然の所産といふことができる。

壺形土器の口縁部が幅の広いふちを形成するのは、北九州では中期後半の須玖式土器にはじまる。城の越式の壺形土器の口縁部が極端に外反し、これを受け継いだ須玖式では、口縁部内面に断面三角形の粘土紐を付着して、上面が平坦な幅の広いふちをもつ口縁部を形成したのである。東九州の場合は一部を除き北九州の文化をそのまま受け継いだものとみてよい。

本遺跡出土のG類土器の口縁部を前記の須玖式土器のそれに比較すると、G類は口縁外側に粘土紐を付着して凸帯状の張り出しをもつ口縁を形成するのであるが、須玖式の場合口縁内面に粘土紐を付着して、上面に平坦面を形成するもので、結果的には多少の類似点はあるが、G類が須玖式の伝播によって発生したとは思われない。(時期的にみてもG類は中期中頃に比定されるので、この伝播は考えにくい。)

弥生時代中期から文様に壺形土器、甕形土器などに共通の文様要素があらわれるようになることは前にも述べたが、G類壺形土器の場合も、入来式に系統をひく甕形土器の口縁部作成の手法が、壺形土器にも行なわれたことは充分考えられることである。

甕形土器も2種類をあげる。D(第3図1~10)溝状遺構出土のD類土器と同一型式である。直口又は内彎する口縁部に粘土帯を貼りつけ、凸帯をめぐらした器形で、胴部の張った器形が多く、平底の充実した脚台をもっている。口縁部は上面を平坦に仕上げたものと、



第七図

外側へ傾斜したものとがある。口縁端部が平端なもの、丸味をもつもの、凹線をめぐらしたものがあり、口縁下には1条ないし3条の断面三角形の凸帯をめぐらし中には凸帯の一部が垂れ下がった形状を示すものもある。焼成は良く、外面は褐色の色調を呈するものが多いが、内面は黄褐色ないし赭褐色である。大部分は輪積み手法を用いるが、一部に巻上げの手法で作成されたものもみられる。刷目または箒磨きの手法で仕上げられたものもある。

J（第2図4～7, 11）器形は壺形土器Dと同様であるが、口縁下に絡繆凸帯をめぐらす点が異なっている。

以上にあげた土器のうち、壺形土器Fと壺形土器D、壺形土器Gと壺形土器Jとはそれぞれ組合せをなす土器である。共に入来式を母体として発生したもので、両者の間には時間的差異はないであろう。

F、D類は南九州より東九州へと伝播した。この事実を示すものとして大隅半島では益丸遺跡、宮崎県では石神遺跡をあげることができる。F、D類の発展形式としては、山ノ口式がある。この形式は南九州から東九州の一部へ広く分布している。

G、J類は分布がせまく、薩摩半島にかぎられ、同類は高橋貝塚の一層および一ノ宮遺跡の第2住居址(34)に出土しており、発展型式としては一の宮遺跡第1住居址出土の一の宮式をあげることができる。

4. 結 び

從来南九州の弥生式土器の編年には、弥生式土器集成がある、これは5様式に分類したもので、第Ⅰ様式=高橋式、第Ⅱ様式=旧大隅式の1部、第Ⅲ様式=須玖式該当の土器、第Ⅳ様式=山ノ口式、一ノ宮式、成川式の1部、第Ⅴ様式=成川式としている。この分類は他地方との関連に重点をおいて編年したために無理な点があった。旧大隅式を2分して、1部を第Ⅱ様式とし、1部を山ノ口式として、須玖式該当の土器（実は須玖式そのもの）をその間に嵌めこむことになり、結果としては、大体同一時期に属すると思われる土器形式あるいは、2時期にあたると思われる型式を3時期に区分したことになった。

森貞次郎氏は「日本の考古学Ⅲ」において、南九州の弥生文化に関して「これ、(大津式)が東九州から南に伝播して日向、大隅、薩摩~~に~~および云々」と述べて、豊後地方で成立した大津式の文化が南へ伝播して、山ノ口式、一ノ宮式が生じたとし、山ノ口式を後期前半とし、一ノ宮式を後期後半に位置づけている。また大津式そのものの時期は「弥生中期中頃以後を中心とする」とみたい。南九州で寺師見国氏によって、かって大隅式とよばれた様式のうちの前半期にあたる。」と述べて、中期中ごろ以後とし、大隅式の1部も同一時期とみている。

弥生中期における文化の伝播について「近畿、東瀬戸内系の土器文化圏が東九州から広がっており、北部九州系土器文化は南端付近から薩南諸島に、それも海岸地方を主として分布しているとみられるが、東九州系の文化圏に圧倒されるかにみえる。」と述べて、南九州の中期弥生文化において東九州系の土器文化の基本的位置を示唆し、北九州系文化の劣勢と須玖式土器の伝播の上限は大隅式よりもやや古いことを述べている。

乙益重隆氏は、「考古学講座4」において、「かって南部九州において大隅式の名で総称された山ノ口式の祖型も城ノ越式にもとめられる。」と述べて森氏の大津文化圏説とは異なる見解を示している。しかし同氏は山ノ口式(35)を中期後半の所産としながら、「南部九州における後期の土器は、山ノ口式(第3様式)の期間が長くつづき、次の1ノ宮式(第4様式)は短期間に終った。」とする森貞次郎氏の説を肯定するような記述を行っている。

以上に述べられた諸説について問題点をあげてみると、第1に南九州弥生中期の前半に該当する土器型式がみられないことである。第2は、山ノ口式、1ノ宮式を後期に下げたことである。第3には、山ノ口式、1ノ宮式を大津式の伝播した型式とし、あるいは城ノ越式に祖型を有するとする点である。

第1の問題については入来式こそこの式に該当する土器形式であるといえる。前述のように入来式は九州西岸の中南部地方において、縄文系壺形土器、前期末の壺形土器などを母体として発生したもので、とくに入来式が形成されたのは南部地域であることは前述した。入来式が同様な境目遺跡や亀ノ甲遺跡のものより多少時期がずれ、壺形土器の脚台が完成し、壺形土器においても新しい要素をふくんでいるからである。

入来式に続く型式のうちD、F類は大隅式の前半と称される1群に該当するもので、益丸、石神遺跡に出土したものがこの型式であり、G、J類に該当するものは、高橋貝塚、1ノ宮の第2住居址等から出土し、この2類の土器も入来式を母体として形成されたもので明かに南九州に発生した型式であって中期中頃に位置するものである。これらの型式が山ノ口式あるいは1ノ宮式の先行型式である。したがって山ノ口式及び1ノ宮式は中期後半に位置するものと云える。

中期後半の須玖式土器の時期になると、南九州には相当量の須玖式土器がもたらされた。從来発見された須玖式土器は、共伴する土器と比較して胎土、焼成、仕上げなど全く異なっており、器形の地域的な変容を受けないものである。丹塗研磨の特殊土器が多く、おそらく交易品として北九州からもたらされたものと思われる。この時期は北九州では土器の生産が規格化、大量化した時代で、他の生産面でも画期的な発展があったであろう。南九州あるいは薩南諸島にもたらされたこれら土器の代替物は、おそらくは暖海産の貝殻であったろう。北九州の諸遺跡にみられるゴボウラ製の貝輪はこのような交易によって得られたものと思われる。

山ノ口遺跡において、軽石礫によってつくられた精円形サークルの外周の四隅に配置された壺形土器4個のうち、1個は丹塗研磨された須玖式土器であり、他は山ノ口式土器であった。

このことは須玖式と山ノ口式の同時性を証明するものであって、この点からも山ノ口式は中期後半に位置するものといえる。

文化圏あるいは文化の伝播については、入来遺跡出土の土器についての記述から、山ノ口式、1ノ宮式が形成された背景は、けっして東九州ではないことは明らかにされたと思う。もちろん、瀬戸内、あるいは東九州、北九州などの文化の影響は皆無とはいえない。ことに北九州文化の影響は基本的なものがある。しかし主体となっているのは入来式という。九州西岸中南部において生成された土器文化であり、これを母体として発展したのが山ノ口式の先行形式(仮称)

であり、つづいて山ノ口式である。これらの土器文化は、西より東へ伝播して行ったものと思われる。

(文責 河口)

- 註 (1) 河口貞徳「南九州地方」 弥生式土器集成本編1 (昭39)
(2) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性1, 九州」 日本の考古学Ⅱ, 河出書房 (昭41)
(3) 鏡山 猛, 乙益重隆「弥生文化各説 九州」 考古学講座4 雄山閣 (昭44)
(4) 森 浩一「南近畿における前中期弥生式土器の一様相」考古学ジャーナル第33号(昭44)
(5) 小田富士雄 亀ノ甲遺跡 福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報 (昭38)
(6) 吹上高校生 久保好実発見
(7) 上村俊雄 発掘
(8) 河口貞徳 発掘 (昭44以降)
(9) 吹上高校社会研究クラブ調査
(10) 川上四郎 東昌寺遺跡発掘報告 鹿児島県考古学会紀要2号 (昭27)
(11) 麻生孝行 有溝の石庖丁 全上
(12) 鹿児島県遺跡台帳 肝属郡6の6 (昭37)
(13) 全上
(14) 乙益重隆 熊本県済藤山遺跡 (第3図39, 40) 日本農耕文化の成生 (昭36)
(15) 森貞次郎 岡崎 敬 福岡県板付遺跡 (第9図13, 第10図36) 日本農耕文化の成生
(16) 全(15) 第11図11, 第12図19, 20
(17) 橋口達也 示教
(18) 小田富士雄 亀ノ甲遺跡 第12図7, 第13図2~6
(19) 全(18) 第12図6, 8, 9, 11, 12 第13図7~23, 25, 26
(20) 全(15) 62頁E
(21) 飯氏出土の甕形土器
(22) 全(15)
(23) 全(15)
(24) 富樫卯三郎 境目西原遺跡調査概報
(25) 河口貞徳 高橋貝塚 考古学集刊3巻2号
(26) 吹上町入来にあり昭和44年7月~現在まで発掘継続中 発掘責任者 河口貞徳
(27) 幅1m 深さ1m 長さ5.5mのゆるやかに蛇行したV字状の溝状遺構
(28) 連天文川内市向田町に前期とみられる壺形土器片 (市来家隆氏所蔵) にもみられ、九州西南地域に行なわれた地域文化とみられる。
(29) 壺は物を容れて交易したことが多かったためかも知れない。甕の移入品は丹塗研磨土器などの特殊な土器にかぎられている。甕形土器炊事用のきわめて日常生活に密着したもので普通装飾的要素をもたなかつた。
(30) 前出(5)
(31) 前出(24)
(32) 河口貞徳 奄児島県高橋貝塚第2図版1 考古学集刊3巻2号 (1965年)
(33) 前記溝状遺構の处在する台地の東南に隣接する一段低い台地 A~Fのトレンチを設定発掘した。
(34) 河口貞徳 一ノ宮遺跡報告 考古学雑誌 37巻4号 第4図8
(35) 乙益氏は須玖該当の土器も山ノ口式に含めている。